



火を焚きて大きな石割る秋耕
 蛇穴に入らず蛇族研究所
 マチネーとソワレのあはひ台風過
 赤蜻蛉自在に群れてゐて必死
 銀鼠の雲の下腹冬夕焼
 秋麗の雲に微音のあるやうな
 さつまいも煮ても焼いても包容力
 鶉篝の火の粉南無阿弥陀仏かな
 望月や蛹は翅を創りをり
 太陽を神に産ませて通草熟る
 譜めくりの人のゐなくて蛇穴に
 星月夜星ことごとく洗ひたて
 案山子翁銃など担ぐ気のなかり
 かまきりの蛻もみぢ見し夜の熟寝かな
 月の夜や父と巡りし文具店

*

窪田英治
 栗原利代子
 金子圭子
 榎木幸子
 我妻民雄
 中澤良子
 柿谷有史
 金井勝代
 山崎和之
 岩上諒磨
 佐藤さく
 横地妙子
 坂田寿美
 許勢元貞
 鏑木ひろこ

占領下も襦袢を替へる月明かり
 露の夜や苧お桶ぼに溜まる紬糸
 阿賀傷めぬ恙虫より小さきもの
 食パンは古墳のかたち秋の朝
 カータリや尻つ端りの脛細し
 さびしさは言の葉の糧雁渡る
 妻の好きな一輪挿しや草の花
 蠶をなくし那須野の茄子の馬
 徳爾の忌時満ちるまで動かずに
 人は今草木のやう秋彼岸
 池の面に映れば近し今日の月
 十月や肥育する村ノルマンデー
 売りに出す我が家の障子貼りるたり
 永遠を信じなさいと名月は
 胡麻爆ぜる上方寄席にいるが如

有賀ふく江
 毛利いずみ
 松井 弓
 西澤日出樹
 竹内京子
 滝澤あや
 大西健文
 松下翔鬼
 河合利枝
 小熊 旭
 木幡忠文
 松岡善郎
 生野智久
 小林さなえ
 原 保次郎

半世紀へ——岳俳句十二月 同人集・岳集から ⑤44 宮坂 静生

巻頭言 ことはを交す出会いこそ最高だ。一年のよき出発に。二〇二五（令和七）年一月二十六日、新年句会をしばらくぶりで松本のホテルブエナビスタで開催する。「岳」発祥の地に戻り、新たな思いで出発したい。いま何が大切か。それは誌友同士の出会いの刺激である。顔を合せてのことば掛けが一番心にひびく。和やかな語らいの場にしたい。思い出しではよかった、生き甲斐になったという会にしたい。翌日は新同人研修会を予定している。ぜひお出かけいただきたい。

大きな石をどのようにして割るか―火を焚いて割る素朴さ

火を焚きて大き石割る秋耕 窪田 英治

冬を前に、来年を睨んで晩秋に田畑を耕す。地味ないい句に出会った。都合のわるい所にあるのか、大きな石を割るといふ。「火を焚きて」温めるといふ気づきに、忘れていた昔の知恵に出会った感銘がある。畑中の大きな巖のような石であろうか。悠々たる大陸の耕人の着想である。

蛇穴に入らず 蛇族研究所 栗原利代子

蛇族研究所とは爬虫類有鱗目をいろいろ飼育しているのか。敏感な蛇である、地球温暖化、毎年暖冬気味で穴に入りたが

なな最高の時か。

さつまいも煮ても焼いても包容力 柿谷 有史

さつまいも好き。さつまいも讚。私もさつまいもは大好き。人間に大事な包容力をさつまいもから感じ取るのが有史君のユニークなところ。あの味は美味とも違い全てを包み込むような包容力と見た点に君の目指す方向性が見えて感銘する。

鶉篝の火の粉南無阿弥陀仏かな 金井 勝代

ひたすら鶉を捕り吐き出す鶉、ご苦労なこと。篝火を背景に思えば佛心に徹しないと鶉の役割は務まらないであろう。南無阿弥陀仏と呟くのである。信心の俳人金井勝代さん。

今月の秀句

マチネーとソワレのあはひ台風過 金子 圭子

演劇人はフランス語を使う。マチネは昼の部の公演、ソワレは夕方からの夜の部。その間には休憩や自由時間が組まれるのであろう。折から台風が過ぎ、ほっと一息ついた時だという。出演者は気を揉み、客の入り心配であった。私は演劇こそ文化の前衛、世の中を改革する原点だと思ひ、好きである。この頃はお芝居を見る機会が少なくなった。さみしい思いをしている。暮しの実は虚から始まる。

らない蛇もいるであろう。研究体制にどんな影響が出るのか、知りたいものだ。句材が豊富であり、世界へ視野を広げてくれる作者。貴重だ。

赤蜻蛉自在に群れてゐて必死 柁木 幸子

空中で群を維持することは寸分も気を抜けない。飛行機への搭乗体験は間接であるが必死の思いは十分に推測できる。秋は必死なるものと悠長なものが混在する季節だ。総決算の時であり、大いなる冬に備える時でもある。

銀鼠の雲の下腹冬夕焼 我妻 民雄

冬の浮雲は見上げると下腹が見える。人間臭い生きもの感覚だ。銀鼠とは輝きを捉えている。バックは一面の冬夕焼。表現が美的でありながら、俗でもある。俳味とはこのような捉え方にも表れることを教えられた気がする。

秋麗の雲に微音のあるやうな 中澤 良子

明るい秋晴の空に浮かぶ雲。雲自体に微かな音がある。飛行機が雲の中に隠されているのではない。何でも無い句であるが、心を澄まして自分のこの世での佇まいを考えているのであろう。いい時は少ない。宙の雲の在り方を思うとは、自

望月や蛹は翅を創りをり 山崎 和之

月の兎は昔話過ぎよう。満月に蛹とは冷え冷えしたクールな発想である。人間の女性の体調が月の支配を被ることは周知。その類推から昆虫の蛹が密かに翅を創造する営みを満月の晩に連想したものか。かなり凝った句であるが、途方もない話ではない。よく考えましたという地味な思索句。粘りがある。現今の俳壇では派手な句が目立つが、こんな堅実な句もほしい。

太陽を神に産ませて通草熟る 岩上 諒磨

なるほど太陽よりも神様が偉いんだ。すべてのものの造物主は神様か。日がかんかんと当り、通草が熟れる。その自然界の仕組みもみんな神様の仕業でござりまする。やさしい身近なことの定義をするような楽しさがある。

譜めくりの人のゐなくて蛇穴に 佐藤 きく

ピアノ演奏者には譜めくりがつく。蛇が譜めくりの指図をしていたわけではないが、蛇が穴に入るし、どうも人手不足らしい。京都在住の作者、合唱団に入り活躍中。その活動中の着想か。蛇穴に入るといふ季語の爬虫類的不思議な実感が働いた句として印象が強い。

星月夜星ことごとく洗ひたて 横地 妙子

単純な星月夜の句だけに印象が鮮明である。「洗ひたて」

は私も用いているが、わっと煌めく秋の星月夜ほど清冽な印象はないであろう。長年のことばへの修練が結実したもの。

案山子翁銃など担ぐ気のなかり 坂田 寿美

案山子の持ち物はなんでもござれ。とはいえ案山子も見識がある。武器は持ちません。武器よさらば。人類は案山子ほどの知恵がなく、いま最低ではないか。これからの世は素朴な案山子に学ぶ。儲ければ武器も輸出入とは、おそろしい世になりつつある。

かまきりの蛻見し夜の熟寝かな 許勢 元貞

かまきりが殻を抜ける。殻が蛻である。蟬は空蟬。脱皮は成長過程として自然の営みである。私は抜殻にいささかの拘りを抱く。掲句の作者は大らかに「熟寝」をしたという。そ

今月の秀句

占領下も襦袢を替へる月明かり 有賀ふく江

ガザやウクライナなどの戦場を思い、この親子はどうなるのであるかと胸が痛む。世界は憎しみの坩堝。だれが手を差し伸べるのか。体制の違い、思想信条の仲たがい、愛とはと、目を瞑って唱える。観念ではなく、具体的な映像が捉えられて迫力がある。作者の造型が緻密になったのがよい。

露の夜や芋桶に溜まる糸 毛利いずみ

芋桶は麻や苧（からむし）の糸を紡いで入れるもの。しかし、糸糸は絹であっても屑繭をつぶし真綿にして糸に撚る。芋桶を用いたのである。染色にかかる作業だろうか、露の夜の静かさがなかなかいい。私は、織物に関する細やかな知識がないが、仕事の進展を想像し気持ちが落ち着く句である。

食パンは古墳のかたち秋の朝 西澤日出樹

明快でいい。秋の明るい朝、食卓の食パンの形がぼっくりと古墳の形との知的な着想に気持ちの安定感がある。僅かな閃きであるが、一日弾んだ気持ち維持でき、うれしい。俳句の効用である。見るものを肯定する自信がつくと、ありあまる繊細さがふとぶとした生き方になろう。

カータリや尻つ端りの脛細し 竹内 京子

「カータリ」は面輪板とともに松本地域に残る七夕人形。「川渡り」から転じた言葉で、川越えを助ける人足。天の川が増水した時に織姫を背負い川を渡る。足が長い。和紙で作られた七夕人形の脇役である。珍しい地貌季語である。

さびしさは言の葉の糧雁渡る 滝澤 あや

人の感情の中でさびしさが精神を鍛える滋養になるという。芭蕉も（うき我をさびしがらせよよかんことり）（嵯峨日記）とさびしさを特別な感情として重視している。憂鬱といった

の穏やかさに、はっと諭されるような感慨があった。

月の夜や父と巡りし文具店 鍋木ひろこ

童面の懐かしさだ。小学生の頃、クレヨンか、明日までに揃えないといけない文具があった。月夜に「こんばんは」と町の文具店を父と回った。文具店が消える時代だけに父とむすめとの思い出は遠い日の貴重なタブローのようだ。

なんだるうとの疑問から「恙虫より小さきもの」とは

阿賀傷めぬ恙虫より小さきもの 松井 弓

「阿賀傷めぬ」の阿賀とは阿賀野川のことと判断するのに難儀した。さらに「恙虫より小さきもの」とはと小半日考えていたのである。阿賀野川を傷めつけたとは？ 新潟水俣病だとはさすがに判断がつかかねて作者に電話して伺い、どしんと胸にきたのである。熊本の水俣病は天下に周知のことであるが、目に見えないメチル水銀は新潟でも「阿賀に生きる」（佐藤真監督ドキュメンタリー映画）で知られた水俣病の原因を生んでいた。

かつて寄生虫の恙虫が羽黒山麓や阿賀野川流域や長野県大町などでつがむし病を発生させ、問題になったことがある。その恙虫より小さいものは、阿賀野川流域の水俣病への社会的な関心があれば、ピンときたのかもしれない。不明を恥じたことである。

漠然たる思いを凝視するには徹底したさびしさにより身を切る思いが必要なことを示唆している。季節は雁が渡ってくる晩秋である。思いの沈潜する時を迎える。

妻の好きな一輪挿しや草の花 大西 健文

バランスがとれた抒情の表現に句材がよく適合し、一読快い感銘が読み手に伝わる。このような安定した情感をベースに独自な捉え方を切り拓いてゆくかが問われよう。

蠶をなくし那須野の茄子の馬 松下 翔鬼

与一を出すまでもなく、那須野は野生の地であった。ところが意外や盆の茄子の馬とはいえ、平々凡々の茄子の馬を見て、愕然とした。いやこれは那須野ばかりではなく、わが内心の覇気に応えてくれるものありやと世を見渡した作と読んだ。老いて意気軒昂な作者である。

徳爾の忌時満ちるまで動かずに 河合 利枝

霜山徳爾忌は十月七日。臨床心理学者として『夜と霧』でイッ強制収容所の体験記録』（初版一九五六年）は畢生の名訳書。逝去されたのは二〇〇九年である。掲句は霜山先生を追想した句であろうが、先生を思えば、あれこれ口に出して話すことはできない、ひとり思いに耽りたいというのである。率直なところ、気になりながら、私には上手に鑑賞できない。

